

災害と人権

～東日本大震災と福島第一原子力発電所事故～

5年前、わたしは被災地支援活動を行つてきました。紫女学園大学の方々と一緒に、東日本大震災被災地共同調査を行いました。

その時の「被災地の声」が今も忘れられません。

見えないものへの恐怖



常福寺 住職 ひろはた 廣畑 恵順さん

避難所では皆さんとてもイライラしていましたね。先がまったく見えないし、人災だという意識があり、怒りの矛先は電力会社に向けられました。首都圏に福島県ナンバーの車で行つたら、放射能で汚れていると言われたこともあります。

放射能って、見えないし、匂いもない。何も感じないから、わからないなんですよ。警戒区域でも雨合羽を着て1時間なら丈夫とか、根拠のない情報が流されました。

歳未満だった子どもの甲状腺検査は今も継続されています。

(公財) 福岡県人権啓発情報センター
第50回特別展「3.11 被災地の声をきく」より参照

おりにふれて廣畑さんの言葉を思い返していたわたしは、今年8月、東北の地を再び訪れる機会にめぐまれました。

しかし、2025年3月現在も、約2万4千人が避難生活を強いられています。

誰もが「つながり」、「人権」を大切にする地域を

いざという時、助け合い、命が守られる地域をつくつていいくことが大切です。

同じ地域で暮らす人どうしの普段からの「つながり」が、災害時に重要なことです。

震災から14年となる今、もう一度、「被災地の声」に耳を傾けましょう。

そして、「人権」を大切にすることは、かけがえのない命を守ることであると改めて考える契機にしていきましょう。

